

# 唱題の功德

『四信五品抄』 (建治二年・一二七七)

## (本文)

問う、その義を知らざる人、ただ南無妙法蓮華經と唱(となえ)て解義(げぎ)の功德(くどく)を具(ぐ)するやいなや。

答う、小兒乳(ちち)を含(ふく)むに、その味(あじ)を知らざれども自然(じねん)に身(み)を益(やく)す。耆婆(ぎば)が妙藥(みょうやく)、誰(だれ)か弁(わきまえ)てこれを服せん。水心(こころ)なけれども火を消(け)し、火物(もの)を焼(やく)あに覺(かく)あらんや。竜樹・天台皆(みな)この意(こころ)なり。重(かさ)ねて示すべし

問う、何(なに)が故(ゆえ)ぞ題目に万法(ばんぼう)を含(ふく)むや。

答う、章安の云く、「蓋(けだ)し序王(じょおう)とは經の玄意(げんい)を叙(じよ)す。經の玄意は文心(もんしん)を述(じゆつ)す。文心は迹本(しやくほん)に過(すぎ)たるはなし。妙樂云く、「法華の文心を出(いだ)して、諸教(しよきょう)の所以(しよい)を弁(べん)す」云云。濁水(じよくすい)心なければ、月を得(え)て自(おのずか)ら清(すめ)り。草木(そくもく)雨を得てあに覺あつて花さくらんや。妙法蓮華經の五字は經文にあらざり、その義(ぎ)にあらざり、ただ一部(いちぶ)の意(こころ)のみ。初心の行者その心(こころ)を知らざれども、しかもこれを行ずるに、自然(じねん)に意(こころ)に當(あた)るなり。

## (現代語訳)

問う。何も理解できない者が、ただ南無妙法蓮華經と唱えるだけで理解したと同じような功德を得られるのだろうか。

答う。例せば赤子が母の乳を含み飲む時に、味がわからなくても、自然に發育していくようなもの。また名医たる耆婆が調合した妙薬は、薬字の知識が全くなくとも、信じてこれを飲めば重病も回復できるのと同様である。水には心はないが火を消し、火もまた心はないが物を焼いてしまう。竜樹菩薩も天台大師も皆このことについて理解していた。重ねてこのことを示した次第である。

問う。なぜ題目の中に万法が含まれているのか。

答う。章安大師は『法華玄義』の序文において、「最初の題目は法華經の王ともいうべきものである。この經王はまさに一經の真髓たる玄意を述べたものであつて、玄意はまた經文の心を表わしたものである。さらに文の心の中に迹門と本門の法門がすべてこめられているのである。妙樂大師は「法華の文心たる題目の五字を基準にして、諸經の勝劣をわきまえる」と『法華玄義釈籤』の第十で述べている。濁った水も月を浮かべておのずと澄んでくるように、草木も雨にあつて花を咲かせるように「妙法蓮華經」の五字は単なる經文というのではなく、月であり雨の役目を果たしたのであつて、意味は理解できなくとも「初心の行者」は信じさえすれば法華經の真意をおのずと体得することができるのである。